

2021年11月7日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書2章1～12節

説教題：あなたの罪は赦された

カナダに行って、珍しかったものの1つに、板葺きの屋根がありました。昔、「大草原の小さな家」というテレビ番組の中で「屋根板を直す」という言葉が出て来たのを覚えていたのですが、私は、板葺きの屋根を見たことがありませんでしたので、「これが板葺きの屋根板か」と珍しがって眺めていたことがあります。日本では、瓦葺きの屋根はまだ多いのでしょうか。スレート葺が多いのでしょうか。しかし、板葺きにしても瓦葺きにしても、屋根を剥がして、天井にも穴を開けて、そこから人を吊り降ろそうと思ったら、大変な作業になるだろうと思います。しかし、イエス様の当時のパレスチナの家はそうではなかったようです。当時の家は粘土で造られていて、屋根は梁と梁の間に木の枝を渡して、その上を粘土で覆うような構造だったようです。ですから表面の粘土を少し掘り返して、下の枝を抜き取るか、押し分ければ穴が開いたようです。またその屋根は平たくて、外には屋根に上るための階段がつけられていました。だから「棺桶の出し入れは屋根から為された」という話も残っています。

さて、本日の説教には「あなたの罪は赦されました」(5)というイエス様の言葉をそのままタイトルに使いました。この言葉は、そしてこの個所は、何を語るのでしょうか。2つのことを申し上げます。

1：信仰の祝福～神との和解

イエス様が、またカペナウムの町に帰って来られました。カペナウムにおける「家」は、おそらくシモン・ペテロの家だったでしょうか。イエス様が帰って来られたというので、大勢の人々が詰めかけ、立錫の余地も無いほどになりました。そこへ4人の人が中風—(「脳出血による身体の麻痺」のような病気でしょうか…)—のために身動き出来ない人を担架に乗せて運んで来ました。ところが、家は入り口まで人で溢れていて、とてもイエス様の所まで近づけません。そこで4人は、彼を担いで屋根に上り、粘土造りの屋根の一部に穴を開けて、そこからこの人を吊り降ろすのです。申しあげたように、当時の家は、大して家を損なうことなく屋根に穴を開けることができましたし、修復も簡単にできたようです。それにしても大胆なことをしたものです。しかし5節に「イエスは彼らの信仰を見て…」(5)とあります。インターネットの動画サイトで、あるご高齢の牧師が訴えておられました。「どうにもならないような苦しみの時、神様に助けを求めれば良いのです。神様は助けようとしておられるのです…」。イエス様は、イエス様に心から期待し、助けを求める彼らの信仰を喜ばれたのです。

しかし、「イエスは彼らの信仰を見て…」(5)という言葉は、興味深い言葉です。「彼ら」とは、中風の人も含まれるかもしれませんが、むしろ担いで来た4人の信仰でしょう。つまり、「ある人」のために執り成す人の信仰によって、その「ある人」にイエス様が働いて下さる、ということをお教えるのです。つまり、執り成しの祈りがいかに大切かを教えられます。3年前に「信徒大会」に来て下さった横山先生がこう言っておられます。「これまで、どれだけ多くの方々の隠れたところでささげられた祈りによって、祝福を受けて来たことだろう。そのほとんどは、知られないままに、知られないところでささげられた祈りだろう。私達は、目に見える人間的な努力や知恵に成功の原因を見ようとする。しかし、天国に移されたとき、永遠に残る仕事のほとんどが、祈りによってなされていたことを知るにちがいない」(横山幹雄)。執り成しの祈りの大切さを教えられます。だからお互いに祈り合うことは素晴らしいのです。自分で祈れない時でも、誰かが神に執り成して下さる、それは本当に感謝なことです。私は今回の手術を通して、祈られることの幸いを、また強く感じました。

しかし、それに対するイエス様の応答は意外なものでした。「子よ。あなたの罪は赦されました」(5)。不思議なお答えですが、この言葉が信仰について教えるのです。なぜ、このようなことを言われたのでしょうか。

1つには、当時の人々は「病気は罪の結果として起こる」と考えていたということがあると思います。「ヨハネ9章」に、生まれつき目の見えない人を指して弟子達が「先生、彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか」(ヨハネ9:3)と尋ねる場面があります。イエス様は「(誰のせいでもない)・神のわざがこの人に現れるためです」(ヨハネ9:3)と言われました。明確に罪と病気の因果関係を否定されました。しかしそのように、人々は一般に「罪が病気を引き起こす」と考えていました。当時のユダヤ教は「あなたが病なら主に祈れ。過ちの道を捨てて正しい道に帰れ。心を罪から清めよ。罪のための犠牲の捧げ物を捧げよ。それから医者を探せよ…」と教えました。つまり、神から罪の赦しを頂かなければ、彼の心は癒しに向かわないのです。彼が何か具体的な罪を犯していたかどうか分かりません。しかしどんな人でも、神の愛に生きることはできていないはずで、あるいは「あれが悪かったのではないか」と思い当たるような罪が、1つや2つはあるでしょう。そして何百もあつた律法の量りで量れば、自分を責めようと思えばいくらでも責められるのです。だから「罪が赦されなければ病気は治らない」と信じている人にとって、まず必要なのは、罪の赦しが宣言されることだったのです。それによって彼の心は、癒されることに向かうのです。ということは、イエス様は、彼らの熱心な信仰を見て、最善の形でそれに応えられたのです。イエス様は、まず「罪の赦し」を宣言され、それによって彼の心に、癒しへ向かう準備ができて、その心と共同作業をするかのようにして、体の癒しを為さったのです。そのための「罪の赦し」の宣言だったのです。

しかし、それだけではありません。2つ目にもっと大切なことがあります。2節に「この人たちに、イエスはみことばを話しておられた」(2)とあります。それは恐らく、イエス様が宣教の初めから語って来られた「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい」(1:15)という言葉だったでしょう。確かに彼にとって、病が癒されることは切実なことでした。いや、何よりも大切なことだったでしょう。だからイエス様は、その願いにも答えておられます。しかしイエス様は、永遠の観点から見た時、病の癒しと同様に、いやそれ以上に必要なものを知っておられたのです。それは「神との和解」です。罪赦されて、神の子とされる必要です。

ある時、「バウンダリー(境界線)」という学びをしました。その中で教えられたことに「人間関係を本当の意味で豊かな、健全なものにするために必要なことは、必要な時に『ノー』と言えること、また他の人の『ノー』を受け入れられること」、ということがありました。しかし、私は「ノー」ということが苦手です。なぜかというと、『ノー』と言って悪く思われたら、好意を持ってもらえなくなったらどうしよう」と思うのです。それを考えた時、天地万物を造られた神様と和解して、神様の好意を得ながら生きて行けるという恵みの大きさを思うのです。その恵みは、日毎の恵みです。さらに永遠の恵みです。私は虫垂炎の痛みから解放してもらった時、「人を苦しみから救う仕事は素晴らしいな」と思ったのです。その時、心に響く声がありました。「クリスチャンの仕事は、永遠の苦しみから人を救う仕事ではないか」。もし、神様を恐れながら、そして死を恐れながら、生きて行かなければならないとしたら、どれだけ人生は苦しいでしょうか。

「ハイデルベルク信仰問答」という問答書は、信仰者の祝福を次のように告白します。「生きるにも死ぬにも、あなたのただ1つの慰めは何ですか…(それは)私が…体も魂も、生きるにも死ぬにも…イエス・キリストのものであることです。この方は…天にいますわたしの父の御旨でなければ、髪の毛一本も落ちることができないほどに、私を守っていて下さいます。実に万事が私の救いのために働くのです…」(ハイデルベルク信仰問答)。「神の守り」という慰めの中を生きることができると言うのです。そして、この言葉で思い出すのは、再三引用する「ローマ書8章28節」の御言葉です。「神を愛する人々、すなわち、神の御計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私達は知っています」(ローマ8:28)。「アルファ・コース」のガンベル先生は「この『すべて』には私達の失敗さえも含まれている」と言います。失敗さえも、やがて益に変えて下さ

る、何という励まし、慰めでしょうか。「メッセージ訳聖書」は「ゼパニヤ書3章」の言葉を次のように訳します。「心から喜んでいいんだ。神様はあなたをもう裁かない。神様がリーダーになってあなたの中に入れてくれる。だからもう悪いことが起こるのを恐れなくていいんだよ」(ゼパニヤ 3:14~15)。神と和解すること、私達は、それによって初めて、深いところから来る平安に支えられて生きることができるのではないのでしょうか。病の中にあっても、神と和解しているなら、神に期待することができます。私の生涯に責任を持って下さる神に委ねることができます。

イエス様が地に下って来て下さったのは、この「神との和解」に生きる人々を生み出すためでした。肉体の癒しは預言者も行いました。ある預言者は、死人を甦らせることさえしました。しかし「罪の赦し」を宣言すること、「神との和解」を与えること、それは預言者の業ではない。それは神様の業です。まさにイエス様だけが出来たことです。CS ルイスは示唆に富んだことを言っています。『罪を—それがどういう罪でも—赦す』…あまりにも途方もないことなので…神でもない者がそんな言葉を出すとするなら…歴史上最大の思い上がりである…しかし、イエスはまさにそういうことをやった男だったのである」(CS ルイス)。なぜ、イエス様にはそれが言えたのか。それはイエス様が、受け入れる人々の罪をご自分の肩に負い、その罪を十字架で始末することを前提として生きておられたからです。私達の人生には病があります。問題があります。しかし、もし私達が神と和解しているなら、私達の魂に響く声があるのです。「子よ、あなたの罪は赦されている。神はあなたに対して怒ってはおられない。神はあなたを我が子として愛しんでおられる。あなたは神の御手の中にいる」。

2. 神との和解をもたらすもの～罪の自覚と赦しの願い

では、何が神との和解をもたらすのでしょうか。ここに律法学者が登場します。イエスが「子よ。あなたの罪は赦されました」(5)と言われたのを聞いて、彼らは心の中で呟きました、怒りました。「神おひとりのほか、誰が罪を赦すことができよう」(7)。何を言っているかということ、神殿で犠牲を奉げて行われている「赦しの儀式(システム)」があったのです。律法学者は、それが神が与えたものだ、と信じていたのです。ところが、イエスは「神殿の赦しのシステム」を無視して、(いわば)道端で「赦し」を宣言された。それで「神殿の儀式以外に誰が勝手に赦しを宣言出来るのか」と怒っているのです。実際、CS ルイスが言うように、神でない者がそんなことを言ったら、おかしいです。しかもユダヤにあっては、自分を神の立場に置いたということで、「瀆神罪」でした。

しかし、ここに彼らの落とし穴があります。律法学者は、病の人を見ると、その人の中に罪を見て裁きました。だから彼らにとって、罪が赦されることなしに、癒しはなかったのです。ところが目の前でイエスによって癒しが起こりました。ということは、彼らの理屈に従えば「罪の赦しが行われた」ということです。ユダヤ人は、神に罪赦されて、来るべき「神の国—(次の世界)」に入っていくことを願っていました。その「罪の赦し」が行われたのです。人には言えない言葉を堂々と宣言し、それを証明する人が、目の前に現れたのです。しかもイエス様は、自らを「人の子」と呼ばれました。これは「旧約・ダニエル書」の言葉ですが、やがて神から遣われる者は「人の子」と呼ばれることになっていたのです。罪を赦す権威を持つ神からの人が現れたのです。待ち望んでいたことが現実になったのです。彼らは諸手を上げて歓迎しても良かった。それなのに、彼らはイエス様に手を伸ばすどころか、呟く、怒る、やがて殺意まで持つのです。

なぜ、真っ先にイエス様の祝福を受け取って良かったはずの彼らが、イエス様を拒否してしまうのでしょうか。彼らは律法の教師として「私は罪の問題の専門家だ、人の罪を判断し、裁くことが自分の仕事だ」と思っていました。ところが、その中でいつしか「自分こそが神の赦しを必要としている」ということを忘れてしまっていたのです。そして彼らはイエス様の差し出しておられる「罪の赦し」を拒否するのです。

だからイエス様は、「信仰と何か」を教えるために、ある時、「放蕩息子」の話をされたのだと思うのです。こんな話です。父親の財産を無理矢理もらって、遠い国へ行って遊び暮らし、そこで財産を使い果たしてどうにもならなくなった息子がいました。どうにもならなくなった彼は、やっと我に返って「父の所に帰ろう」と思います。「ただ父にお願いして赦してもらおう、そして息子ではなくて、ただの雇い人としてやり直しをさせてもらおう」と思います。そして彼は、ボロボロになって父の家に帰りました。彼には父に見せることのできるものは何にもありませんでした。「赦してもらおう」、それしかなかったのです。しかし父は、息子が帰って来た、そのことをただ喜び、走って行って出迎え、一切を赦し、大事な我が子として受け入れたのです。この譬え話は、聖書の中で唯一、神が走る姿を描いている話だ、と言われます。それほど神は、人が罪を悔い改めて帰って来るのを待っておられるのです。イエス様は、この譬え話を通して「人は、ただ自分が神の御心に適わないことを自覚して、赦しを請い、神から全てを赦してもらって、受け入れてもらうしかないのだ。それが神と人との関係なのだ。それが信仰なのだ」と教えられたのです。

私は、洗礼を受ける時も、その後も、自分が罪人であることを分かっています。しかし、仕事の失敗を通して「自分も罪人だった」と教えてもらい、ボロボロの心の状態で神様に赦しを願いました。その時、神様が、教会を通して赦しを宣言して、私を受け入れ、私が神の恵みを感じながら生きることができるようになりました。先日、虫垂炎の手術をした時も、神様は平安を下さり、術後は、日に日に癒して下さいました。罪赦されて、神様と和解できる、本当に感謝なことです。三浦綾子さんもトラクトに書いています。「私が悪かった、おゆるしてくださいと言う人を、神は喜んで迎えようとしておられるのだ」(三浦綾子)。イエス様が「これを知って欲しい」と願われたのは、私達が、自らの罪深さ(欠け)を認め、ただ罪の赦しを請う時、神は、私達の罪を全く赦して、私達を神様と和解させて下さり、神との恵みの関係に入れて下さるということです。私達は、ただ赦されて、神様との関係に入れて頂いた—(入れて頂く)—のです。その恵みを忘れないように、神の御前を謙遜に生きて行きたいと願います。

終わりに

今日、「あなたの罪は赦されました」(5)という御言葉から学びました。赦されて、神と和解させて頂き、神との恵みの関係を生きることができ、それがキリスト教信仰です。その恵みを良く教えてくれるのが、「アメージンググレース」を作ったジョン・ニュートンの最晩年の言葉です。「私は、2つのことだけは覚えている。1つは私がとんでもない罪人であったこと。もう1つは、キリストはとんでもない救い主であったということだ」(ジョン・ニュートン)。